神で勇者で莫迦な俺

たこ焼きの神様

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神で勇者で莫迦な俺

【Ｎコード】
Ｎ３０２５Ｙ

【作者名】
たこ焼きの神様

【あらすじ】

～～～～（一応）あらすじ～～～～

実は神の息子で、現在は神代理という主人公：天野　剣斗（あまのけんと）１４歳は、いろいろあって隔離都市（しじんまち）四神街の西に存在する雷西学園（中等部）に編入することに。
そして、またまたいろいろあって、自分が勇者であることが告げられる。

この街では毎年あるイベントが行われる。その名も“区間戦争”。
剣斗は一応この区間戦争にて優勝するために、クラスメイトを始め、
学園の仲間たちとともに“朱雀”“青竜”“玄武”に勝る力をつけ
ようと努力するが…。
勇者一行による“非”日常的な物語、ここに開幕！！

プロローグ（にしていいのか此処…）（前書き）

どうも、たこ焼きの神様です。
この小説が初投稿です。しかも人生初の自分で書いた小説（笑）
正直上手くないですが、興味のある方は是非、読んでみてください！！
あ、あと更新遅いのは勘弁！！

プロローグ（にしていいのか此処…）

「くそっ！ここはもうダメか？」
「だろうな、もう諦めよう、對馬…。」
「でも…もうすぐアイツがっ！！」
ドンッ！
パンッ、パンッ、パンッ！
乾いた銃声が響き渡っている。
そこに広がるのは、生と死の境目。
血と汗が滴る戦場。そのものだった。だが、そこにいる兵はみなゲームをしているような楽しそうな表情。
押されているであろう、白の特攻服を着た兵たちは希望に満ちた表情をしている。
まるで、誰かが来るのを待っているように…。
「おい、沙鬼。空を見ろ、空を！」
見上げた空には、巨大な戦艦。この状況であんなのはもはや絶望的な事態だ。
だが…。彼女は微笑っている。
「フッ、これは、潰し甲斐があるな…。」
「おい、でもあれはさすがにやばくないか？アイツがいつ来るかわかんねぇのに。」
「だが龍斗、アイツはいつも、こんだけ待たせておいて、登場だけは空気を読んでいる。そうだろ？」
「それもそうだな。」
この3人だけじゃない。ここにいる全員が誰かを待っている。
そう、ゲームだ。ゲームでいう、まるで勇者を待つ囚われた姫のように…。
その時だ、この入り組んだビルの谷間に眩い光が走った。
それは、希望の光…。

「やっとか…。勇者ご一行。」
「またせたな、みんな。ここからが本番だぜ！」
勇者と呼ばれた少年が、そう言うと、その場に吹く風は向きを変えた…。
形勢逆転…。まさにぴったりの言葉だ。
ほんの一瞬で、押していたはずの青い甲冑を着込んだ兵たちが引いていく。
本当にゲームのようだ。事が淡々と進むだけ。だったのだが…。
「おい、勇者気取りのアホ剣斗。」
「は、はい？な、なんでしょうか、沙鬼さ、ん？」
「かーなり息苦しいんだが…、もういいか？」
「いやいやそこはもう少し粘ろうよ。」
「そうは言ってもな。ほら、對馬なんてもうストレスが限界みたいだぞ？」
名は沙鬼というのであろう少女が指差したほうには、今にも感情を爆発させて暴れだしそうなやつが、必死になって自らの理性と格闘している。
「いや、アイツに関しては期待はしてなかったさ。むしろよく粘ったほうだと思うよアイツにしちゃ。」
「ま、それもそうだな。で、そっちはどうだ龍斗。」
「どうしたんだ、沙鬼。」
と、まじめな顔で切り返すのは、龍斗と呼ばれた少年だ。
「いやいや、どうしたじゃなくて。ていうかもういいんじゃないの？そのキャラ。少し殴りたくなってきた…。」
「それもそうだな、あーあ、疲れた。こりゃ明日かなり精神的にくるな。」
「おいおい、お前らなぁ。もう少しまじめにやろうよ。これ、一年で一番重要なイベントなんでしょ？なあ、龍斗？」
「それはそうだが、剣斗、おまえがいる時点でこっちは勝利確定。もうチート状態なんだぞ。スター取って暴れまわってる状態なんだ

ぞ？」
「でもさぁ…。はぁ…。やっぱいいや。俺ももうメンドクセー。あー。チート兵器一号。もういいからさ、さっさとやっちゃいなよ。」
勇者、剣斗は自分の後ろにいる少女を指差して言った。
「えー。あたしがやるの？お兄ちゃん。」
「ああそうだ。あと、そのお兄ちゃんってのやめろって言ってるだろ。恥ずかしいから。」
「そんなこと言われても、癖になってるんだから仕方ないじゃん。」
「あー、まあそんなことはいいからさ、ドカーンとやってよ。」
「まあいいか。そのかわり、こんど私にアイスおごってよね。」
「ああ、覚えてたらな。」
と、軽く話を済ませてから。勇者は軽々しく言い放つ。
「んじゃ、千穂。青竜の親玉をさっさと殺っちゃって。」
「はーい。ていうか、死なないんだから殺るっておかしいんじゃない？」
「そうか？まあいいや。んじゃ、行ってこーい。」
「はいはーい。」
シュン――――――。
ド――――――――――ン！！！！
シュン――――――。
「ただいまー。」
「お疲れ千穂。」
「疲れてない。」
「あっそ……。」
そう言うと、勇者は、ポケットから携帯を取り出した。誰かに連絡を取るのだろう。
プルルルル。プルルルル。
ガチャ。
「あ、もしもし、俺だけど。そっちはどうなってる？」
「ああ、剣斗か。大丈夫。もう少しで頭を取れる。」

だが、電波が悪いのか
「何？もう少しで何だって？」
「頭が取れる。」
「ああ？カツラが取れる？おまえカツラだったのか…。大変だな…。
」
「ちげーよ！頭だ。“か・し・ら”。」
「ああ、頭ね。」
「で、そういうそっちは？」
「ああ、もう親玉から冠球もぎとって終了～。」
「はあ！？目玉から眼球くりとって終了！？」
「馬鹿か、“お・や・だ・ま”から“か・ん・きゅ・う”もぎとって終了。」
もはや漫才だ…。緊張感の欠片もない。
「そうか、そっちの部隊に親玉がいたのか…。」
「ああ。だから、もう冠球は奪ったんだ。お前らはいいんじゃないのか？」
「いや、それじゃあつまらんだろ…。てなわけであと3秒で仕掛けは完了だ。」
「へいへい。さっさと終わらせろよ…。っと、ああそうだった。爆破するなら先に言ってくれよ？耳栓しないと鼓膜がやばいから…」
「了解。」
ガチャ……。
こんなんでいいのだろうか…。
ここは戦場だ…。
戦場のはずだ…。
なのにこの軍の兵は全然涼しい顔をしている。
それも、そろいもそろって皆だ。
兵隊全員が、この戦争を楽しんでいる。
しかし、これは戦争といっても……。
死なない戦争だ…。

武器は本物の銃。痛みも感じる。
だが死なない。死ぬことはない。たとえ死に程痛い思いをしようが関係ない。
しなないのだから…。
「おいみんな！！アイツの爆発が来るぞ、耳ふさげ！！」
わっと、戦場が沸き上がる。
それほど大きいのだろう、その爆音は…。
そして、兵が皆耳を塞いだ直後…。
ド――――――――――――ン！！！！！！！！！！
と、炸裂した光の後に続いて、爆音が響き渡る…。
いくら死なないって言ってもやり過ぎではなかろうか…。
だが、勇者という設定である剣斗は、なんとなく自分の設定を貫く。
「みんな、青竜は打ち取った！！これで残るは朱雀と玄武のみ！！
こっからが本番だぁぁぁ！！！！！」
オォ――――――！！
と、兵たちの士気は一気に上がる。
ふと勇者は思う。
なんでこのようなめんどくさいことになったのか。
てか、俺ってなんで勇者な訳？
と…。

波乱の自己紹介（前書き）

こっからの編集ミスかなり多めだと思うんですが、目をつぶるか指摘してくださるとありがたいです！！

波乱の自己紹介

「おまえは今日から、勇者だ。」
そうだ、この瞬間、俺の世界は１８０。変わったんだ。

俺は今、教室の前にいる。でも、まだこの教室には入ったことがない。この学校、雷西学園は、ここ隔離都市四神街の西に存在する。まあ、これも聞いた話なのだが、この都市（まち）には、雷西のほかに、南、北、東、というように、それぞれ対立した学園があり、それぞれが、毎年秋に行われる区間戦争で勝つために、特別なメンバーを集めて育成するらしい。

んで、ここがその一つ、西の育成所。というわけだ。俺はこの冬にここへ転校することになった。編入試験も普通レベル、実戦だって普通レベル。ついでに、顔も普通レベル。
これといって目立つところのない俺が、この学校で唯一、特別を名乗っていいのは・・・
そう、自分が”勇者”だということだけだ。

（ガラッ）
教室のドアが開けられた。
「天野、入っていいぞ。」
俺は教室に足を踏み入れた。
そして・・・。
一歩下がって、二歩下がって・・・。
「どうした、天野？」
っと、ここはしっかり第一印象をよくしなければ。
もう一度教室に入る。
今度は、さっきほどではなかった。
だが、やはりクラス全員の視線はかなりきついものだった。
「んじゃ、天野。テキトーに自己紹介な。」

適当ってオイ。教師が言っていいことじゃない気がするがまあそこはスルーだ。
第一印象、第一印象。そう自分に言い聞かせて、
「天野（あまの）　剣斗（けんと）といいます。」
と、ここですでにクラスがざわつき始める。
（うわ…これは絶対違うな）
（てことは、他のクラスに取られたか…）
（あれがそうなわけないわ…）
なにがそうでないのかわからないが……一つ分かるのは、俺の名前がパッとしないってことくらいだ。
だが、ここからまた、クラスの反応が変わることなど、俺はまだ知ってるわけがなかった。
「……えっと、一応…勇者です……」
……少しの沈黙の後
一番前の席にいたやつが声を上げた。
「…マジ、かよ……」
そして他のやつらも
「うぉぉ！」
「やったぜー！」
「私たちのクラスだー！」
と、口々に喜びの声を上げている。
しかしそれはそう長く続かなかった。
「おまえら、一旦静かにしろ…。」
先生の声でみんなはまた静かになった。
「天野、自己紹介続けてくれ。」
なんなんだよこれ…。
なんでみんなは、入ってきた時からは想像もつかないような目で俺を見る！？
まあ、いいか。
「えっと、学科はメインがエレメントマスター」

みんなはさぞ顔の筋肉が柔らかいんだな…。
また表情変えやがった…。
今度は、驚きの表情かな。
だが、そんなことは関係ない。
「サブはまだ決まってません。」
ここから先は、俺自身も言おうか言うまいか迷った。
でも…言わなきゃ落ちつかねぇ…。
「得意魔法は、火炎術と…神術です。」
――――――――――――――――――――シーン――――――――――――――――――――
「「「し、神術――――！？」」」
はは…
やっぱりそうかい…。
まあこれは予測していたんだが、結構照れるな…。
先生までが驚いてる。
確かにそれも無理はないんだが。
何しろ神術ってのは、その名の通り”神”の力を使うことができるんだから。
「まだ、来たばかりで此処のこともよくわからないから、最初は迷惑かけると思いますけど、よろしくお願いします。」
とまあ、適当に言ってれば、第一印象は“普通”として通るだろう…。
が…。
先生の一言で、その念願は叶わない。
「…えっと。じゃあみんな質問なんかあったら訊いていいぞ。」
さーて、ここで地獄の質問ターイム！
って、ほんとに地獄だよ…。
「じゃあ、えっと…その神術って…具体的にはどういう……」
って、初っ端からそこかよ……
それはラスボスだろーが。まあそこで終わってくれるならある意味ラッキーか…。

「先生、今ここで少し使ってもいいですか？危なくないのにするんで。」
そう、これが一番早い。耳で聞くより目で見ればわかるだろ。
「ああ、いいぞ」
「んじゃ、さっそく……」
クラスのみんなの目が期待の視線を送ってくる。
どうせカッコイイ呪文的なものを期待してんだろ…。
ま、そう思っててもないものはないんだけどねー。
「フェリス、出てきていいぞ…。」
ポンッ！
俺は相棒の名を呼び、手を前に突き出す。
そう、こんな簡単な動作だ。だが…。
俺の目の前には、人の顔一つ分くらいの小さなドラゴンが現れた。
「…」
だが今回はさっきよりもかなり早く、その沈黙は崩れる。
「ド……ドラゴン！？」
さっきの一番前の席のやつが、またも声を上げる。
他のやつらも驚愕の顔だ。
「剣斗、遅いよ呼ぶのが！あそこがどれだけつまんないか知ってるでしょ！！」
少し子供っぽい可愛い声で、そのドラゴン、フェリスはわめき散らす。
「仕方ないだろ、手続きなんかもあったんだから…。少々我慢しろっての。」
「剣斗のバカ！」
と、フェリスはそっぽ向いて言う。
こんな普通な会話なのだが、当然これもみんなの驚きの対象だ…。
「「「しゃべった――――！？」」」
「い…今、そのドラゴンしゃべったのか！？」
「ああ」

「なんでドラゴンがここにいるんだよ…。」
「そりゃまぁ。呼んだから。」
「どうやったらドラゴンなんか呼べんだよ…。」
「神術で。」
もう、めんどくさいから終わらせることにしよう…
「先生、もういいですか？」
「ああ。」
「あ、あとコイツ、出したままでいいですか？うるさいですが、黙らせとくんで。」
「まあ、邪魔にならないのなら。」
やっぱ、大人はいいねぇ。話が早くて済む。
「ちょっと剣斗、うるさいって何だよ！」
「そういうことだ。」
「ほんと、デリカシーがな」
「サイレント…」
「……（いんだから）」
「……（って、ちょっと。コレどうにかしてよ！）」
「黙るならいいぞ…」
「……（わかったよ、黙ればいいんでしょ黙れば。）」
「ああ、黙ればいい。」
そういって俺はサイレントを解いてやる。
しかし
「剣斗！どういう」
「サイレント…。リミット３０」
「……（またやったな！？早く解けー）」
「３０分は解けないぞ…。」

と、クラスがざわついてるうちに、俺とフェリスはしょーもない会話をしていて…。
かくして“地獄の自己紹介”は無事幕を閉じた。

訓練開始！！（前書き）

数字とか横になってるのは勘弁！！

訓練開始！！

今は授業後の休み時間。
俺の席には当然の如く行列ができていた。ほかのクラスのやつも交じっている。
まぁ、転校初日ってのは大体みんなこうなんだろうが…。
と、ある男が俺に近づいてきた。
「よう。天野だっけ？俺は水上龍斗（みなかみりゅうと）このクラスの委員長で、アクアマスターだ。よろしくな。」
まあ、この類のやつは、いいやつってのが相場でき決まってる。仲よくなってて損はない。
「ああ。こちらこそよろしく。」
ふと、隣にいるやつの存在に気付いた。
「で…。そっちは？」
俺は、いかにも不真面目そうな、隣向いてしゃべってるやつのほうを向いて訊いた。
「ああ。對馬、自己紹介よろしく」
「おっ、そうだった。俺の名前は大地對馬（だいちとうま）このクラスの問題児だ。」
おいおい、自分で言うなよ…。
「對馬、そりゃ自分で言ったらおしまいだ…。」
「いいじゃんかよ。ホントのことだし…」
「そりゃそうだけど…。」
「そうそう、それより、天野。俺たちのメンバーに入らないか？」
「メンバー？」
嫌な予感がしてたまらない。そう思いつつも、訊いてしまった。
「そりゃ決まったんだろ、“ＢＴＢシュガー”だ」
は……？
「なんだそりゃ？」
「ＢＴＢシュガーってのは、Ｂ美少女Ｔ追跡Ｂ部隊　のことだ！」

ただのストーカーだし……。
「…ま、まぁいい。んでそのシュガーってのは？」
「ああ、これ？これは俺らのボスが佐藤ってんだ、んで　佐藤＝砂糖＝シュガー　ってわけ。まあ、佐藤のもじりだ。」
…これは手を出してはいけない類だな…。
で、こんなことを大きな声で話してもなんの反応もないこのクラスって…。
と、思っていたら。
「コラァァァァ！！転校生に変な勧誘するなぁ！」
と、逆方向から、少女がドロップキックをしながら飛びかかってきた。
「だ、誰ですか！？」
「あぁ、済まない。私は闘上沙鬼（とうじょうさき）だ。今後よろしくたのむよ。」
蹴とばした大地を踏みつけながらの自己了解だ。
「えぇ…こちらこそ…。」
でも、この子も悪い奴じゃあなさそうだ。
ホントにここは個性的なやつばっかだな…。

まぁこうして俺の転校初日は終わったわけなんだが（実際終わってなかったりする）俺の机の周りを取り囲むようにさっきの3人が陣取っている。
「で…何？」
そして3人そろって
「「「頼む！！」」」
「明日、神術の授業があるんだけど、その…予習が全くで…」
「天野ならよく知ってるから天野に訊こうとなったわけだ…」
「すまないが、教えてはもらえんか？」
上目づかいにこちらを見上げてくる3人に、俺は耐え切れず…
「あ…はは、いいよ、俺でよければ…」
「じゃあ、天野の家に集合―」

「「おー」」
「お…お～」
と、かくして俺の家に向かってるんだが。
「なぁ、俺の家は親いないからいいけど、おまえら大丈夫なの？」
「あぁ、俺らも親はいないからＯＫだぜ」
「そう、ならいいんだけど…」
いいや、ほんとはよくない。
なんせあの家にはまだ、曲者が一人残っているからだ。
と、そんなことを思ってるうちに、家に到着。
まあ自分で言うのもなんだが、俺の家は結構広い。
「おいおい…なんだよこれ…」
「デカすぎじゃね？」
「凄いわね…」
と、口々に感想を漏らしているが、ほんとにそんなことぐらいしか言うことがないくらいデカいんだよなぁ、無駄に…。
「ま、みんな、今日はゆっくりしていってよ」
「うぃーっす」
「了解」
「お世話になる」
さ、“アイツ”が帰ってくる前に早く部屋に逃げ込まねぇと…。
ガチャ
家のドアを開ける…
「ただいまー（誰もいない。と思ってる）」
「「「お邪魔しまーす（誰かいる。と思ってる）」」」
ガチャ
次は、リビングのドアが開く音だ。
しかし、俺たちはまだ玄関だ。
嫌な予感しかしない…
そして、そいつは姿を現した…。
「お兄ちゃんおかえ…り…？」

そう、俺の妹だ。
なぜこんなにもみんなと引き合わせたくなかったかというと。
こいつは家の中じゃ、下着だけになるというどうしようもない癖があるからだ…。
「ち、千穂……。帰ってたのか…？」
「うん…で、そっちは？」
「ああ…こいつらね。俺のクラスメイト…」
「あ…ああ、そうなの…」
「どうも…千穂ちゃん…だっけ？」
「こ、こちらこそ…。」
「お、おい天野…。一ついいか…？」
「な、な、何だ？」
「じゃあいくぞ…」
「おう…」
「俺の理性が保ってるうちにその娘に服を着せてくれぇぇぇぇぇ！！！！」
「キャ――――――！」
「あははは…、千尋～、服着ろ。」
「う…うん」
そして千尋は、自分の部屋へと消えていった…。
まあかくして俺の部屋に到達したわけだが、神術って言っても何を教えればいいのか…。
しかし神術は、初歩レベルなら普通の人にも使えるはずなのだが…。
「なあ、神術を教えろって、何を教えてほしいんだ？」
訊いてみると、水上が切り返す。
「まあ教えろって言っておいてなんだが、明日の授業はそこまで難しくないんだ。でも、先生が神術の初歩なら俺ら一般生徒にも使えるからそれで実戦をやるって言ったんだ」
つぎは大地
「で、お前にそこのレベルまで教えてもらってたら、授業も楽かと

思ってな」
ふぅ、そういうことか…。
一から原理の説明やら云々を教えなきゃいけないのかと思っていた俺は馬鹿なのか…？
いいや、それは違う
なんせこいつら、泊るぞって言ってるような装備だから。
3人とも大きなショルダーバックを持ってきている。
今思うと学校から直行したのにどうしてこんな大きな荷物を持っているのか不思議なのだが、まあ俺としてはさほど問題ないので放っておくことにした。
「ま、そういうことならさ、ここの地下には俺がいつも特訓してる訓練所があるんだ、そこなら神術や魔法なんかを使っても平気だから、そこで練習しよう。」
水上や大地は乗り気だが、闘上は疑問があるような顔をしている。
「すまない。ちょっといいか、天野は最近引っ越して来たんじゃなかったか？」
「あぁ、そうだけど」
「ではなぜ、ここの地下にある訓練所を“いつも使っている”と言ったのだ？」
「ああそれね、この家には１０年前から住んでるんだけど、この家もさ神術で移動できるんだよ。それでここに家ごと引っ越して来たってわけ。」
「なるほど。しかし神術とはなんでもできるんだな。」
「まあ、魔力の許す範囲ではね」
そう駄弁ってるうちに地下室に到着した。
「みんな、ここからは戦闘しながらの説明になるけどいいかな？」
「どうしてだ？この中は訓練所だろ？どうして戦闘になるんだ？」
「それは訓練所って言っても神術のだから、中に入ると訓練ロボが大量にいて、サバイバル状態ってわけだ」
水上は不安そうな顔をしたが、大地のほうはやる気ＭＡＸのようだ

「へっ、面白そうじゃねーか。何が来ようと俺がぶっ飛ばしてやる。」
こちら闘上も静かながらもかなり闘気に満ちているようだ。
この二人は実戦好きってことだな。
「じゃ、設計上危なくないようになっているけど、怪我だけはしないように。あと、この中でダメージを受けると、そのままの痛みを感じるんだけど、実際は怪我などはないから、混乱しないようにね。」
3人とも無言で頷く。
「じゃ、行くぜ。」
「「「お――――!!」」」

訓練所要時間2時間余り…（前書き）

即行４話目です。
もう少ししたら更新ヤバいほど遅くなる（と思う）よ～（笑）

訓練所要時間2時間余り…

ここは、訓練所のA区間。ここはまだ訓練ロボが出てこない場所だから落ち着いて話せるようにはなっている。
「じゃあ、ここら辺で一通り神術の説明でもしとくかな」
しかし、大地がそれを遮って言う
「ちょっと待ってくれ、俺はあそこにいるロボットを倒したくてたまんねぇんだけど」
こいつは理屈でどうにかできるやつじゃないな。まあでもここでアイツらを攻撃してくれれば神術を嫌でも教えてもらわなきゃいけなくなるから、好都合っちゃあ好都合だな。
「いいぜ、ここからでも攻撃は届くはずだから、相手はあれ以上近づけない。思う存分やればいいよ。」
「それじゃあ遠慮なく！」
大地は魔法を発動する体勢をとる。
スゥゥゥゥ――――――。
と大地の体から魔力が溢れる。
「いくぜ、グランドクラシュ！」
大地の手から波紋状の衝撃派が放たれる。
刹那。
大地が放った衝撃派が地面に到達した瞬間、普通の地面なら跡形もなく消し飛んでそうなぐらいの衝撃が、地面を走った。
ここが対神術用の設計じゃなければ、今頃全壊だろう。
しかし、予想以上の威力だ。これなら神術を（初歩だが）使いこなすのも時間の問題だろう。
爆煙が薄くなっていく。
「へっ、どうだ…」
しかし、大地の期待とは裏腹に、ロボットのほうには全く傷一つ付いてない。

「マジ…かよ。何でだ、今のは俺の中でも結構威力の高い魔法だったはずだぞ。」
「大地、それは仕方ないことだ。みんなも分かっただろう、コイツらには魔法が効かねぇ。倒したけりゃ、神術を使わなきゃいけない。」
ここは神術の訓練所だから、普通の魔法でやられてたんじゃ意味がねぇ。
「でも、最初のほうの敵は、簡単な神術でも粉々になるような敵ばかりだ。」
俺は、掌に、小さな光の玉を作ってみせる。
「こんな風にね」
そして、ゆっくりとロボットがいる方へそれを投げる。
そんな簡単な、そして全く何の苦も無く、ゲームしながらでもできる動作なのに。
それが一体のロボットに当たった瞬間…
ドンッ！！
光の玉は、鈍い音を立てて破裂した。
そして、踏ん張っててもふき飛ばされそうなくらいの風が俺らを襲う。
そう、これはただの爆風だ。簡単な動作が引き起こした、簡単に説明のつく爆風だ。
そして…。目の前のロボットは跡形もなく、消えていた…。
「とまあ、こんなとこだよ。神術の初歩っていうのは」
初歩でこれだけの破壊力を持っているのに、上級になるとどうなんだって思うのが自然なのだろう。しかし、上級に上がるにつれて神術は、普通では考えられないようなことをできるようにはなるが、殺傷能力はさほど上がらない。というか、神術はもともと自衛のための魔法だから…。
「って、3人とも気絶か…。まあ最初は無理ないか…でも。朝までにはこんなの屁でもねぇくらいにしてやるよ……。」

でも…。こりゃ３０分くらい起きねぇか…。
と思った瞬間…。
ポンッ！
と、小さな音を立てて、もうみんな忘れていたであろうフェリスが現れた。
「おっはよー剣斗！」
「ったく、うるせーな。スリープモードはもう終わりか？」
「いや、まだなんだけどなんか外で面白そうなことしてるから起きた」
せっかく静かだったのに…
「あっそ。じゃあ、あまり騒ぐなよ」
「了解――――！」
こいつは、スリープモードと言って、まあ簡単に言うと睡眠時間的なのが決まっていて、その時間内は異次元にいなければならない。そこには、フェリスのようなドラゴンもたくさんいるんだが、こいつが友達を作らないせいで、つまらないからという理由で常時連れ歩かなくてはならない始末だ。
「それにしても、すぐに終わっちゃいそうだなぁ…」
俺は小さく呟いた。
「ん、なんか言った？」
「いいや、なんでも…」
終わるっていうのも、さっきの大地の攻撃を見ると、魔力、戦闘センス、技量、どれをとってもかなりのものだ。だから、案外早くに神術を習得しちゃうんじゃないかと…。
他の２人はどうか知らないが、なぜかそんな気がするんだ。
と、
「い…痛――――――。」
ん？
「痛ぇなクソッ！」
大地の声だ、もう目が覚めたらしい。

「よっ、と」
「ふぅー」
他の2人もそろって起きてくる。
ふと、大地が俺に気付いて、
「お、天野。おまえさっきのどうやったんだ？凄すぎだろあれ！俺たち今からあんなの使えるようになるのか？なあ？」
…ノリノリだなおい。
「對馬、少し落ち着かないか」
しかし、ここは闘上が鎮める。
「なんだよ、堅ぇな沙鬼は…」
それにしても、結構仲がいいんだなこの2人。
って、そんなことは関係ないが、ここからが大変なのに……分かってんのか、こいつら…。
それから一時間ほどたった。
色々苦労したけど…。もう最終段階か。
「よし、3人とも。自分が完成させた技を使って、A区間のボス。“タイタン”を倒したら、一通りのことは終わる。さ、準備はいいか？」
と、いい雰囲気になりかけたところで、フェリスが水を差す。
「ねぇ剣斗。こういうのって修行中をもっと盛り上げるんじゃないの？」
余計なことを…。と、思ってるのは俺だけじゃなさそうだな。
「色々と事情があんだよ！」
「ふーん」
ったく、マジで空気読めないやつだ…。ま、この際どうでもいいんだが。
「…気を取り直して」
俺たちは、結構広いホールのような場所に来ていた。
どこか薄暗く、いかにもラスボスって雰囲気の出てる場所だ。
ま、設計したのは俺だが…。少し臨場感を出しすぎて、禍々しい気

配が漂ってきてるところがまた妙に薄気味悪い…。
「さ、出てこいタイタン！」
俺はフェリスを召喚した時のように、手を前に突き出して叫んだ。
すると何もない虚空に、光が集まり、強い殺気とともに黒い影が姿を現した。
徐々に見えてきたソレは、この場の禍々しさをより一層強くさせる漆黒のボディに、そこから溢れんばかりのダークオーラを放っている。
そこでようやく水上が声を上げた。
「…俺たち今からこんなのと戦うのかよ……。」
確かに外見だけで感想を聞くと十中八九、恐ろしいってなるだろうが、実際この3人の実力なら、全然倒せるんじゃないかと俺は踏んでいた。
続いて水上の緊張を解くように、闘上が言う
「…こいつは。對馬のドス黒いオーラよりも黒いオーラが出てるな…。」
確かにその通りの考察に俺たちは大地をかばうことができない…。
「ああ沙鬼。だが、茶番はそこら辺にしといたほうがいい。そろそろ戦闘準備が整うぜ、アイツ…。」
大地が言い終えた瞬間―――。
タイタンの目が黄色く眩い光を放った。
来る―――！！
「行くぜ、遅れんなよ！」
先頭を切ったのは大地だ。
「先手必勝！ロックプリズン！」
これは大地が神術の一つ“具現”をアレンジしたものだ。
タイタンの周りに格子状の岩を出現させて、檻にしている。
もともとグラヴィティマスターだったため、自分のエレメントが土や岩を使う魔法に適応している。そのため、自分との相性はばっちりだ。

ひとまずこれでタイタンの足止めはできる。だが抜け出されるのも時間の問題だ。
しかし、その一瞬の隙を使って、闘上は魔法を発動させる体勢を整える。
「影武者…八式！」
タイタンが檻を抜け出した瞬間、今度は八方位から現れた影がタイタンを襲う。
これも神術の一つ“幻覚”だ。
闘上もまた、女性にしては珍しい、ダークファイターだったので幻術の扱いはお手の物みたいだ。
“幻覚”は“具現”と違い、実体はないから物理的ダメージはないが、相手の精神へのダメージや錯乱には向いている。そして、実体がない分、必要魔力は極めて少ない。
ガツッ！
へぇー、結構考えたんだな…。
闘上のやつ、幻覚の中に本物を一つ混ぜてやがる。こりゃタイタンも手に余るな…。
だが……。ダメージは殆ど0に近い。タイタンは、動きこそ遅いが、体力と防御力だけは底なしだ。ちまちまダメージを与えても限がない。
だが、そろそろ水上の準備もできたみたいだ。
「ウォーターロック！！」
あいつのは、神術の“具現”と、自分の得意な水霊術の特性である吸収を組み合わせてできている。タイタンの足を地面に、手を天井に、それぞれ拘束してそこからさらに魔力を吸収する。しかもあの場合は吸収した魔力を直接技の使用分に回してもまだあまりが出るくらいの吸収量だ。これならいくらタイタンが馬鹿みたいに体力があっても放っておいたら力尽きるだろう。
しかし、こいつらはそれじゃ終わらせねぇ…。
「沙鬼！龍斗！」

大地が叫ぶと二人とも分かったと頷く。
そして、3人同時に両手を前に突き出すと
「「「「トライアングルデストロイヤー！！」」」」
と叫ぶ
その瞬間、3人の間に強烈な光が集まり、一点に集中する…。
その色は、次第に紫色へと変化していき……
一気にタイタン目掛けて発射された。
そして、その光の球がタイタンにぶつかった瞬間、
タイタンは跡形もなく砕け散って…消えた…。
これは、神術の最後の一つ“破壊”だ…。
だが…。
ここまで使いこなせるなんて…。
こいつら、やっぱり普通じゃない。
戦うことに慣れているっていうレベルではない。戦うことに特化している。
そういった感じだ。
「お、お疲れ…。」
俺としたことがかなり動揺している。
「ああ、どうしたんだ？顔色悪いぞ」
大地が俺の顔を覗き込んで言う。
「それなんだけど…、俺は確かにお前らならタイタンぐらい倒せると思っていた。だが、お前らの実力は只者ではないって感じだった。いったい何者なんだ？おまえらは…。」
すると、驚いたような顔をして、水上が答える。
「そうか、天野にはまだ話してなかったな…。俺たちのこと。いいや、今説明する。俺たちは、もともと3人で活動していて…去年も区間戦争に出たんだ。そこで俺たち3人は、チームを組んで行動した。そのときについた俺たちの通り名は、“迅雷の狼牙”これは、俺たちが一瞬のうちに戦場を駆け巡り相手の冠球を砕く様からつけられたものだ。俺たち自身にも二つ名があってな、沙鬼は“幻霧の

神鬼”。大地は“岩鉄の魔人”俺は“氷結の水霊”。しかしあまりにも早すぎる攻撃に、その姿を見た者は一人としていなかった。これが、俺たちが伝説とされていながら、普通に生活できている理由さ…。」
これはさすがに驚いた…。
この町に来てすぐに耳にした強者の噂、“迅雷の狼牙”。それがこいつらだったなんて…。
「どうりで…強いわけだ。」
これなら納得がいく。予想よりはるかに早いが、もうここで修行などする必要はない。
「じゃあ、もうマスターできてるんだから、帰るか？」
俺は3人に問いかけた。
「そうだな、俺もう腹が減ってたまんねぇ…。」
鳴るお腹をさすりながら、大地が言った。
「そうだな、私もそろそろ限界だ。」
「俺も。」
と、他の二人も賛成のようだ。
「じゃあ、帰りはすぐだから。んじゃ、行くよ。エスケープ！！」
一瞬、青い光が俺たちを包んで、視界が開けたらもうと扉をくぐっていた。
「さ、到着。」
「早いな…。」
水上が尤もな感想を漏らすが、みんなそんなことはどうでもいい。早く飯が食いたい。それだけだ。
「じゃあ、すぐ千穂に飯作らせるから、俺の部屋で待ってて。」
「わかった。」
俺は言い残すと、リビングへ向かった。

Ｉ　ｒｕｉｎ！！　（破滅だ！！（笑））（前書き）

はい、予告通りこの後からの更新は遅いですｗｗｗ
ていうか、自分で言うのもなんだけど
闘上のキャラ最後壊れてます！！
まあ、この小説まだキャラ設定明確じゃないんで…。
決まってきたら設定公開します！！

Ｉ　ｒｕｉｎ！！　（破滅だ！！（笑））

ガチャ。
「おーい、千穂。」
「あ、お兄ちゃん。早かったね、もう修行は終わったの？」
「ああ、予想以上に上達が早かったんだアイツら。もう初歩は完璧だ。」
「へぇ。初歩って言っても魔法最高ランクの神術をもうマスターするなんて、すごいんだねあの人たち。」
「ああ。それよりさぁ、アイツら今日泊まってくって言ってるから、飯はいつもより多めで頼む。」
少し驚いた様子だったがすぐに容認してくれたようだ
「了解。じゃあ少し離れてて。」
「あいよ」
俺は、千穂の座っているテーブルから離れた。
そして千穂は両手を前に突き出して、呪文を唱える。
“具現タイムアクセレレーション”、モーメントクッキング！」
千穂が叫んだ瞬間、テーブルには、高級レストランにでも来たかのような錯覚をさせるような料理がずらっと並んだ。
これも神術の“具現”の中でも時を操作する能力だが、上級をアレンジしたレベルなので、俺もやり方は知らない。
「ふぅ～。完成。」
「ご苦労さん。」
「全然。それより、修行してきたんでしょ？魔力回復作用のあるものを多く作ったから、少しはみんな、楽になると思うよ。」
「気遣いありがとな。じゃあ3人を…」
呼ぼうと思ったのだが…。
二階から、すごい音を立てて、三人とも降りてきた。
「お、おい何だこの匂い。」

大地がたまらず声を上げる。
「ああ、千穂が神術で作った料理。ほら、そのテーブルの上。」
俺はテーブルを指差して言った。
すると、大地は…。
「なんだ…これ…。今の時間でこれ作ったのか？」
感嘆の声を上げながら千穂に尋ねる。
「はい。でも、所詮は神術で作ったものですけど…。」
それにしても豪華な食事はさっきまで動きっぱなしだった3人にとっちゃ、かなり食欲をそそる。
「食っていいのか？」
さすが大地、もう我慢できねえみたいだ。
「千穂、お前ももう飯でいいだろ。」
「うん、少し早いけど問題なし。」
じゃあ…。
「「「いただきま――――す！！」」」
…。
闘上と水上も限界だったらしい。
まあ、俺もそろそろやばいな…。
「いただきます」
っと、どれから食おうかなぁ…。
こんだけあると迷って仕方がないんだが、普通は…。
普通じゃない大地はもうすでにおかわり3回目という超人的な食いっぷりを発揮している。
そういえば、今までの食事よりも少し豪華な気がする。
「千穂、お前こんなにバリエーションあったっけ？」
どうでもいいが尋ねてみた。
「うん、でもいつもは二人だから食べきれないでしょ？」
そういうことか…。でも、俺がい訊きたいのはそうじゃない。
「そうじゃなくて、その魔法って、自分が作れる料理じゃないと作れないんだろ？」

そう、この魔法は確かに便利なのだが料理が苦手だと意味がない。
それに
「それに、料理の味は自分の腕に比例するんだろ？いつこんなの練習する時間があったんだ？」
だってこの料理、見た目もそうだが、味も高級レストラン並みだ。
ちなみに俺がやっても卵かけごはんで手一杯だろう。
「ああ、そういうこと？まあ、部活でもやってるし練習ならいくらでもできるから。」
「そっか」
納得、納得。
まあ、こいつが料理できるのは知ってたし、そう驚くほどのことじゃないか。
そうだとしても、アイツらはそうはいかないみたいだな。
闘上はかなり興味があるようだ。
「千穂ちゃん。よかったら私に料理を教えてくれないかな！！」
疑問符じゃないし…。
まあ、女子なら普通の反応だ。
しかし、闘上もまだ中学生なんだし、そんな真剣にならなくても大丈夫なんじゃ…。
まあ、かくして食事を終えた俺たちは、まだ時間が余っているとのことで、俺の部屋で駄弁っていた。
が、俺はふと思った。
こいつらに俺の境遇は話さなくていいのだろうか、と。
話したほうがいいだろう。
そうだ、こいつらの過去も聞いたんだし俺も…。
「な、なぁお前ら。少し話があるんだがいいか？」
恐る恐る尋ねる俺。
「「「ん？」」」
3人とも息ぴったりの返事。
「えっと～。おまえらの過去も聞いたから、そろそろ俺の境遇も話

そうかと…。」
すると、結構興味があるのか、３人とも顔を近づける。
近い。
少しやばいんじゃ…。特に闘上。
まあいいか。
「じゃあ、改めて自己紹介から。」
おれはゴホンと咳をして集中する。
しかし
「「「別にいい…。」」」
と、あっさり切り捨てられた。
だから…。
だから俺は…。
苛々して言ってやった。
最後に取っておこうと温めていた。
俺の最後の砦であろう最強の極秘情報を。
「じゃ、じゃあ、俺の親。そう、俺の親は…。“神”だ！！」
言…っちゃった。
さすがに信じてはもらえな……
「「「はあぁぁぁぁぁあ！」」」
「「「まあ、そうだったんだ…」」」
……いこともなかった……。
「えっと…、信じてくれるのか？？」
こいつら…。
ありえねぇ、俺も最初親から「おまえは神の息子だ」なんて科白をきいたときにはかなり動揺したんだが…。
こいつら、いとも簡単に受け入れやがった。
（……何だこいつ。邪気眼か？）注：地の心の声
（俺の耳はいったい……）注：上の心の声
（Ｉ　ｒｕｉｎ！！！！！！！）注：闘上の心の声（訳：破滅だ！！！！！！！）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3025y/

神で勇者で莫迦な俺

2011年11月13日16時09分発行